

施設実習における コミュニケーション力の必要性について

岩本 健一

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

Study on the necessity of communication skills in facility training

Kenichi Iwamoto

Naragakuen University Narabunka Women's College

施設実習を終えた学生にアンケートをとったところ、学生が施設で働くことに好意的かそうでないかの回答には、実習で子どもと関わることができるか否かに関係していた。「はい」と答えた学生は苦勞しながらも一生懸命子どもと関わり生き生きと実習をしていた。「いいえ」と答えた学生は、子どもとの関係が築けないことを原因として消極的な実習態度をとることが多かった。そのことと関連して、共起ネットワーク分析から「はい」の場合は能動的な行動語群がネットワークとなり、「いいえ」の場合は客観的な考察語群がチェーンとなっていることを読み取ることができた。このことから、学生のコミュニケーション力の向上を図るための事前指導が必要であることが分かった。

キーワード：施設実習、実習指導、進路選択、施設保育士、共起ネットワーク分析

1. 研究目的

1.1 研究目的

本学幼児教育学科では、施設実習を卒業年次の6月下旬から7月にかけて行っている。施設実習の目的について土谷（2005）¹⁾は「講義や演習を通して身につけた知識や技能を子どもと直接かかわりながら知識や実践への応用力を学ぶためである。」としている。松藤ら（2016）²⁾は「施設実習は、学生の施設に対する理解や意識を変え、多様な発達段階や状況にある児童を理解し、専門性を高める上で非常に重要な機会となる。」と述べている。このように、施設実習は、現場の知識や実践への応用力を学びながら、卒業後の進路を十分に意識する機会であるといえる。しかし、多田内ら（2013）³⁾が指摘するように、養成校に入学した学生は「第一希望の職種は幼稚園、保育所と考えられ、入学時から施設への希望を持っていた学生はわずかであり、大半の学生は施設への就職は考えていない。」のである。本学では、保育所実習Ⅱを6月上旬に終え、施設実習が終わったところから学生はいよいよ就職に向けて活動するのが通例である。その際、進路の選択肢として、施設保育士を選ぶ学生が少なからず存在する。そうした

学生が選択肢に施設を選んだ背景には、入学後の学びが影響していることは明らかであって、とりわけ施設実習によりその影響を受けていると考えられる。それゆえ、本稿は、施設実習を終えた学生にアンケートを取り、施設実習を経験することで施設に対する意識と進路選択に影響が生じたか、またその原因は何か、について明らかにするものである。

1.2 施設実習の概要

本学における施設実習の配属施設の種別は表1の通りで、2017年6月19日～7月29日の期間をほぼ3期に分けて、26か所の施設において90時間以上実施した。本学の施設実習は、すべて児童の施設で実習を行っており、とりわけ児童養護施設での実習が配属人数の割合からみて全体の70.2%を占めているのが特徴である。その他、乳児院で実習する人数の割合は15.6%、児童心理治療施設は6.3%、児童自立支援施設は4.7%、障害児入所施設と児童発達支援センターはそれぞれ1.6%となっている。他の短期大学との比較のため、母子生活支援施設と障害者支援施設の概要も表1に記した。

表1. 施設実習の配属先

| 配属施設の種別 | 施設数 | 配属人数 | 人数割合 | 施設の概要 |
|------------|-----|------|-------|--|
| 児童養護施設 | 16 | 45 | 70.2% | 主に2歳～18歳の児童が保護者に代わって養育される施設 |
| 乳児院 | 5 | 10 | 15.6% | 主に2歳までの乳幼児が保護者に代わって養育される施設 |
| 児童心理治療施設 | 2 | 4 | 6.3% | 家庭や学校での人間関係や虐待などが原因で、心理的に不安定になり日常生活で生きづらさを感じる児童が、入所または通所により治療される施設 |
| 児童自立支援施設 | 1 | 3 | 4.7% | 不良行為など行動上の問題や環境上の理由により生活指導等を要する児童が、入所または通所により自立の支援を受ける施設 |
| 障害児入所施設 | 1 | 1 | 1.6% | 障害のある児童が入所により、保護、日常生活の指導及び自活に必要な知識や技能を身に付ける施設 |
| 児童発達支援センター | 1 | 1 | 1.6% | 就学前の障害のある児童が通所により、日常生活における基本的動作の指導、知識・技術を取得し、集団生活に適應できるように支援を受ける施設 |
| 母子生活支援施設 | 0 | 0 | 0% | 生活上の問題を抱えた母親と児童が一緒に入所して生活できる施設 |
| 障害者支援施設 | 0 | 0 | 0% | 18歳以上の障害者が入所により、日常生活、社会生活の支援を受ける施設 |
| 計 | 26 | 64 | 100% | |

図1には本学を合わせて6つの短大における実習施設の種別の割合を示した。グラフは、B短大⁴⁾、C短大⁵⁾、D短大⁶⁾、E短大⁷⁾、F短大⁸⁾からのデータをもとに筆者が作図した。グラフから他の短大は、障害児施設（障害児入所施設と児童発達支援センターを合わせたもの）の割合が9%から27%を占めていることが分かる。また、障害者支援施設には、C短大を除き、20%から51%の割合と、短大によっては半数を超える学生が18歳以上の障害者を対象とした施設で実習を行っている。

C短大では、障害者支援施設での実習は行っていないものの、母子生活支援施設での実習が14%を占めている。このように、本学以外の短大では、18歳以上を対象とする障害者支援施設及び母子生活支援施設での実習が一定数含まれることが分かった。また、本学以外では児童自立支援施設での実習は行われておらず、児童心理治療施設での実習も本学とB短大以外では行われていないことが分かった。このことを全国の短大の実態として断じることはできないが、一応の傾向として読み取ることができると

思われる。

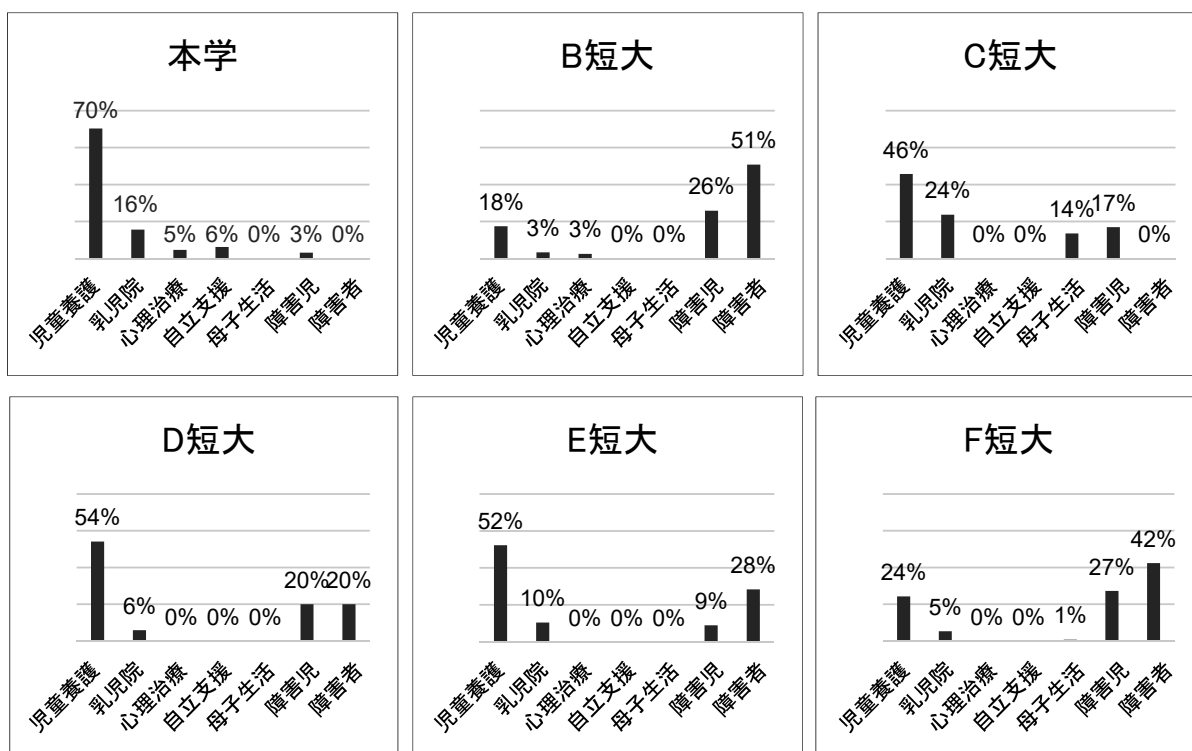


図1 各短大における実習施設の種別の割合の比較

2. 研究方法

2.1 調査対象

本学保育士資格取得希望学生の64名。(内訳) 二年制コース 13名、三年制コース 51名。

2.2 調査内容

(1) 施設実習希望調査

- ①調査時期 2016年12月(施設実習指導の授業の全15回のうち8回目)に実施した。この時期は、実習に参加する前年度であるため、調査対象となる学生は、二年制コースは1年生、三年制コースは2年生であった。
- ②内 容 施設実習に参加するにあたって、希望する施設の種別を第1希望から第3希望までをその理由とともに記入させる。選択肢は、「児童養護施設・乳児院・児童心理治療施設・児童自立支援施設・障害児施設・どこでも良い」の7つで、個別の施設名は記入しない。
- ③方 法 単純集計によるカテゴリーごとの分類を行うとともに、他短大との比較を行う。

(2) 施設実習後のアンケート調査

- ①調査時期 2017年12月(後期の「相談援助」の授業の15回目)に実施した。調査対象となる学生は、二年制コースは2年生、三年制コースは3年生で、卒業を控え、就職内定率(内定

者/求職者)が70.1%^{注1)}の時であった。注1) 2017年12月18日現在本学学生就職課調べ。

②内 容

質 問 「施設実習に行つて、施設で働こうと思ひましたか？」に対して、「はい・いいえ」の二者択一で回答させ、その理由をレポート用紙1枚に論述で回答させる。

③方 法 カードワークにより構文ごとに理由を分類した。併せて、KH Coderによる共起ネットワークを使った分析を行った。なお、対象者には、本研究の意図を説明し、回答者個人を特定しないものであること、教育・研究以外の目的以外には使用しないことを口頭で説明し了承を得た。

3. 結果と考察

3.1 施設実習希望調査

実習における学びに影響を与える要因として、実習先施設がどのように決定されたかということが関係している可能性があると思われる。古川 (2016)⁹⁾は、実際に希望した実習先で実習を行ったかを検討し、約73%の学生が希望した実習先で実習を行えたこと (傍線引用者)を報告している。

しかし、松藤ら (2017)¹⁰⁾は「実習先の決定に当たっては、可能な限り学生の希望が反映する形で決定することが望ましいと考えられるが、必ずしも全ての学生が希望した実習先で実習を出来ない場合、そのことが実習に対する意識や態度に影響を与えることも推察される。特に実習先の希望理由として、就職の意識や学びのためという積極的な理由付けを行っている場合、その希望した施設で実習を行えないことは、実習に対して動機付けにネガティブな影響を与える可能性も考えられる (傍線引用者)」と述べている。

したがって、慎重に実習施設と学生とのマッチングを行う必要がある。本学では施設実習指導の授業で、施設実習の意義と目的や、施設の業務内容や保育者の役割を学習させる。また保育者として求められる態度、行動、倫理観、支援の技術も学習させる。さらに、グループ学習によって施設の種別ごとの特徴を調べ、発表を通じて理解の共有を図りながら、施設実習に対する意欲を高めるようにしている。これらを踏まえて、全15回の授業のうち8回目の授業において、希望する施設の種別を第1希望から第

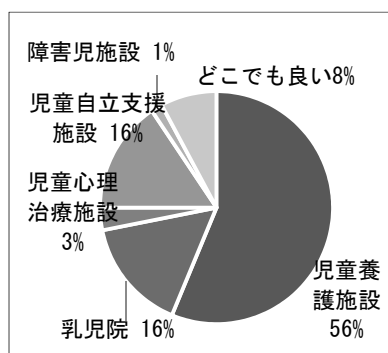


図2 施設実習希望調査

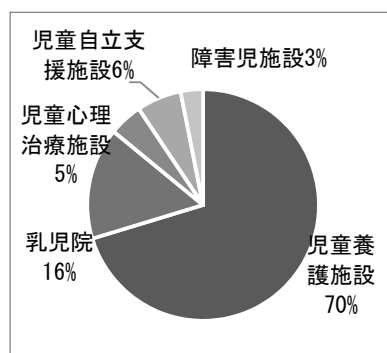


図3 配属した種別

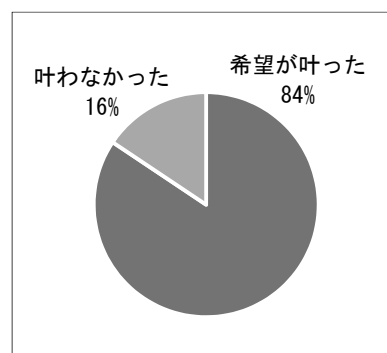


図4 第1希望通りの種別かどうか

3希望までをその理由とともに記入させた。

選択肢は、「児童養護施設・乳児院・児童心理治療施設・児童自立支援施設・障害児施設・どこでも良い」の7つで、個別の施設名を記入はさせていない。第1希望の結果は図2のとおりになった。16%の学生が児童自立支援施設を希望しているが、これは前職が児童自立支援専門員であった指導教員から聞く職歴の話に興味を持った学生がいると考えられる。また、どこでも良いと答えた学生が8%いるが、どの種別にも興味があり一つに絞り切れないという学生の声を耳にした。

図3は実際に学生を配属した施設の種別である。これは、26施設との契約により決定している人数割りであるので、希望するか否かに関わらずこの枠組みに当てはめていかねばならない。長年続く関係から把握した施設の特性を考慮した上で、学生個人の適性と自宅からの距離や友人関係などの条件を擦り合わせて配属を図った。図4は、希望した施設種別と配属した施設種別との一致を表したものである。希望する種別を「どこでも良い」とした学生は、「希望が叶った」に分類した。この結果、第1希望の実習種別で実習を行うことになった学生は84%であった。これは、先に古川が報告した割合よりも11ポイント高かった。このことから、本学では施設実習の動機付けについては、ポジティブな影響を与えている可能性が高いことが分かった。

3.2 施設実習後のアンケート調査

この調査は、施設実習を終えた学生に「施設実習に行って、施設で働こうと思いましたが?」と問い、施設に対する意識をどのように持ったのか、さらに進路選択をどのように考えているのか、について明らかにするものである。施設実習参加学生は、64名であり、その全員がアンケートに回答した。

3.2.1 施設への就職希望

「はい・いいえ」の二者択一の設問に「はい」と答えた学生は63% (40名)、「いいえ」と答えた学生は37% (24名)であった。さらに、「はい」と答えた学生のうち、実際に施設に就職した学生は19% (12名)であった。(図5) 他の短大で、施設で働こうと思うと答えた学生は、図6から分かるとおり、B短大¹¹⁾では62%、C短大¹²⁾では50%、D短大¹³⁾では30%であった。このことから、施設に就職を希望する学生はB短大と同じ程度であり、他のC短大、G短大の2校に比べて多いということが分かった。

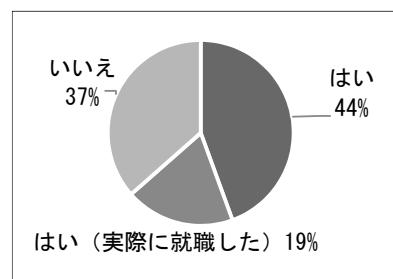


図5 本学 施設への就職希望

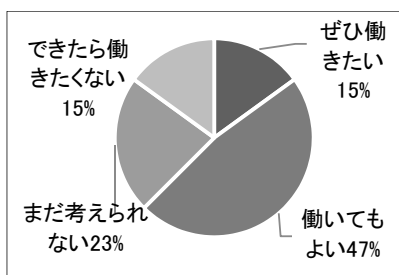


図6 B短大 施設への就職希望

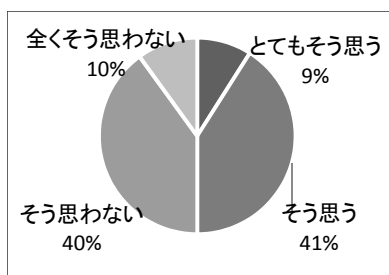


図7 C短大 施設への就職希望

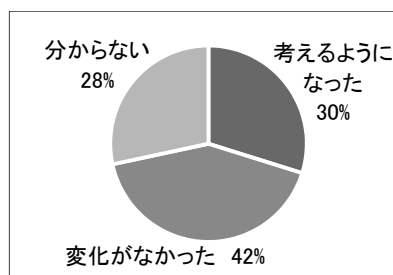


図8 G短大 保育所以外への就職希望

3.2.2 施設への就職可否の理由

「はい」「いいえ」のそれぞれの理由について論述で回答を求めたが、寄せられた回答は最小371文字から最多1084文字、平均745文字の分量であった。回答を分析するため、理由と思われる構文ごとに分別したところ、全部で186構文あり、一人当たり平均2.9個の理由があった。

①働こうと思う理由について

働こうと思うに「はい」と答えた学生の理由をカードワークにより分析したところ、

- ①子ども要因（子どもに愛着が湧いた・関係が取れた）31%
- ②職員要因（雰囲気が良い・職員が良い人）31%
- ③自分要因（向いている・スポーツを生かしたい・働きたいと思っていた）19%
- ④社会的使命（虐待をなくしたい・子どもを助きたい）16%
- ⑤勧誘（うちに来ないか）3%

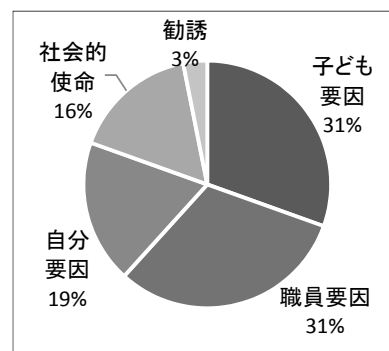


図10 「はい」の理由

の5つの理由に分類することができた。（図10）

そこからは、施設実習に参加した学生が、苦勞しながらも一生懸命子どもと関わり、職員の仕事ぶり

表2 働こうと思うに「はい」と答えた学生の記述の抜粋

- ①子ども要因（子どもに愛着が湧いた・関係が取れた）
 - 本当に少しずつですが、子どもが話し掛けに応じてくれたり、逆に子どもから話しかけてくれたり、変わっていたのが分かりました。言い方はとても荒々しかったけれど嬉しかったです。
 - 実習に行ってみて、初めは目も合わせてくれなかった高校生の女子が最後には話しかけてくれて嬉しかったのを覚えている。とても小さな進歩でもこんなに嬉しいのだから、その子にあったやり方を見つけたら、とても嬉しいのだろうと思った。
- ②職員要因（雰囲気が良い・職員が良い人）
 - 職員と子どもの姿を見ていても、とてもフレンドリーで家族のような感じに見えました。子どもたちも職員の人たちのことをすごく信頼していて、何でも話せる関係で、まるで母のように接している姿が見られ、子どもたちと職員の信頼関係というものがとても大切な仕事なのだと思います。
 - 職員が子どもたちに接する様子を見てみると、自分の子どものように愛情深く接し、常に優しく見守っておられました。子どもたちにとって幸せは、「安心」があることだと気づきました。
- ③自分要因（向いている・スポーツを生かしたい・働きたいと思っていた）
 - 私は、母がとても強く真っ直ぐ私を育ててくれたので、曲がらず大人になることができました。私自身の経験から子どもたちに寄り添うことができると感じたため、児童養護施設で働きたいと思いました。
 - 私自身、チームスポーツをやっていたので、このような体制はすごく働きやすそうだと思います。施設で働きたいという気持ちが芽生えました。
- ④社会的使命（虐待をなくしたい・子どもを助きたい）
 - 子どもたちは家庭環境により苦しい過去や辛いこと沢山ある中で、その苦しみを抱えながらこれからも生きていかなければならないと思うと、私はそのような子どもたちと明るい生活を共に歩んでいきたいと強く思いました。
 - 施設にいる子たちは虐待され親元を離れて暮らしており、とてもひねくれた性格になってしまっている子が多いように実習に行ってみて感じました。そんな子どもたちを見て、私のように周りの大人の関わりによって、社会や大人又は人間に対して恐怖や憎悪を持たなくても良いということを知ってもらいたいと思いました。
- ⑤勧誘（うちに来ないか）
 - 施設で働こうと初めに思ったのは、施設の職員に勧められたから。
 - 施設長さんがここで働かないかと言ってくださったので、私は働いてみたいと思いました。

に励まされ、子どもとの関係を楽しいと感じるようになって、自分はこの仕事に向いているのではないかと思ひ、子どもの役に立ちたいと考えるようになった。すると施設の職員からも勧誘を受けた、というモデルを描くことができる。表2に、記述された理由の一部を抜粋した。学生が生き生きと実習をしている姿が思い浮かぶ。

②働こうと思わない理由について

働こうと思うに「いいえ」と答えた学生の理由をカードワークにより分析したところ、

- ①子ども要因（子どもが難しい）41%
- ②職員要因（支援が難しい・生活のケアが大変）23%
- ③自分要因（なりたい仕事に他にある）17%
- ④労働環境要因（泊まりが大変・勤務が長い）19%

の4つの理由に分類することができた。（図11）

「はい」の理由に比べて、「いいえ」の場合は子ども要因の割合が多く41%を占めている。そこからは、施設実習に参加した学生が、苦勞したにもかかわらず、子どもとの関係がうまくいかず、辛く投げやりになってしまい、到底職員の

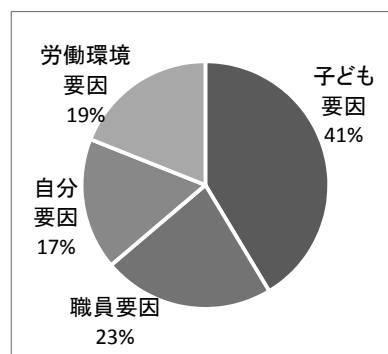


図10 「いいえ」の理由

表3 働こうと思うに「いいえ」と答えた学生の記述の抜粋

①子ども要因（子どもが難しい）

- 思春期の子どもたちへの関わりが非常に難しく、「話し掛けないで」「触らないで」という子どもの反抗的な言葉を、真正面から受け止めてしまい、傷つくことも多かったです。相手が反抗期で、さらに心の中に何らかを抱えている子どもであるとわかっていても、辛いものがありました
- 子どもたちが実習生に慣れていることから、試し行動や無視が多く、「しんどい」「やめたい」と思う回数が増えていった。またさまざまな事情を抱えた子どもたちを知る程関わり方に悩み、肉体的なものより精神的に追い詰められた。

②職員要因（支援が難しい・生活のケアが大変）

- 24時間、交代をして子どもと関わりつつ、子どもの親とも連絡を取ったりしなければならないのは大変だと思うし、すごいと思います。でも私にはその仕事は荷が重すぎると思ったんです。話すことが苦手な私には、関係が悪化している親子の橋渡しなんて到底できません。
- 基本的な生活習慣すべてを教えていかなければならないと考えると、とても無理だと感じてしまいました。また、最終的には自立していける子どもに育てていかなければならないし、施設で働いておられる職員の方のように、愛情を注ぎながら支援していくのは私には向いていないと思ひ、施設では働きたくないと思ひました。

③自分要因（なりたい仕事に他にある）

- この短大に入学するよりもずっと前、小学生のころから「保育園の先生になること」が夢だったからです。
- 私がこの短大に入った理由は、幼稚園教諭になりたいという気持ちからでした。
- 施設で働こうと思ったことは一度もありません。小学生のころからずっと保育士になるのが夢で、高校生の時にはすでに「〇〇保育園の保育士になるんだ」という明確な目標が決まっていました。

④労働環境要因（泊まりが大変・勤務が長い）

- 職員の勤務時間は驚くほど長く、早出、遅出が決まっているにもかかわらず一日中寮にいる職員が多かったです。施設の職員の方からすると、それは当たり前なのかもしれませんが、私は仕事場は仕事、休みは休みというようにメリハリをつけたいので、向いていないと感じました。
- 私が働くのを断念した理由としては、夜働くことがあるからです。泊りがあり、昼夜逆転してしまう生活になって、体調面に不安があるからです。夜一人で任されたりする、夜回りなどや問題が起きると、それで睡眠が取れなくなるということがよくあると聞くからです。

ようにはできないと壁を感じて、やはり自分には保育所が向いているのだと合理化し、宿直があるから施設の仕事なんかできない、と施設を否定的にとらえてしまったモデルを描くことができる。このように「いいえ」と答えた学生は、実習中に子どもとの関係が築けないことを原因として、消極的な実習態度をとることが多いと分かった。表3に、記述された理由の一部を抜粋した。学生が実習に辟易している姿が手に取るように分かる。

このことから、学生が進路に施設を選択するか否かの判断には、実習で子どもと関わることができるか否か、に関係していることが分かった。

3.2.3 共起ネットワーク分析による「はい」と「いいえ」の学生の行動・考察の関係性の違い

本節では、学生の行動や考察の関係性を明らかにすべく、テキストマイニングソフト KH Coder を使用し、共起ネットワークを使った分析を行った。共起ネットワークとは、出現パターンの似通った語、共起の程度が強い語が、線で結んだネットワークとして描かれ、語と語が互いにどのように結びついているか読み取れるものである。「はい」・「いいえ」それぞれの学生の記述から「動詞」を抽出し、関係性を図示した。最大出現数の設定を「はい」は5個、「いいえ」は3個で行い、利用される語の数を「はい」は57語と「いいえ」は56語にほぼ合わせた結果、図11と図12のような図を示した。

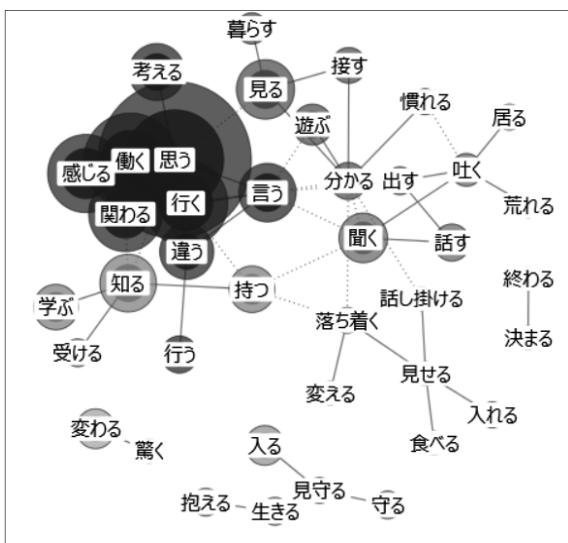


図11 「はい」と答えた学生の動詞分析

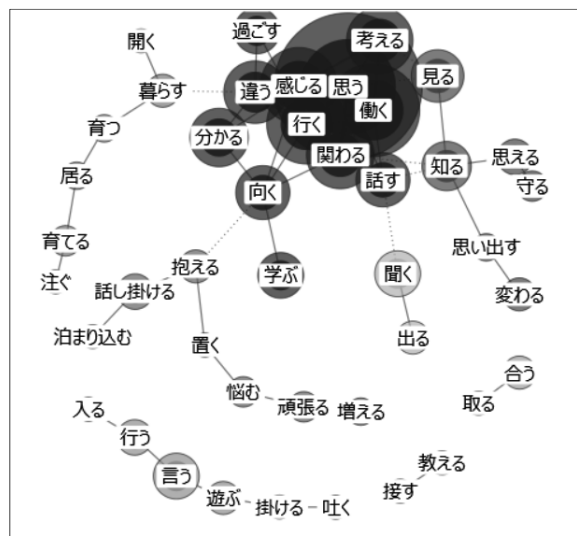


図12 「いいえ」と答えた学生の動詞分析

出現数の高い動詞は、「はい」・「いいえ」とも、思う、働く、行く、感じる、関わるが上位5位であった。「はい」と答えた学生の記述では、多くの動詞が互いに結びつき、ネットワークを構築している。さらに、結び付いている「分かる—見る—遊ぶ—接す—慣れる—聞く—一言う」などの言葉はすべて能動的な行動を表す語である。一方、「いいえ」と答えた学生の記述では、語の関係が網の目ではなく、ひとつなぎの関係に留まっていることが多い。さらに、結び付いている「暮らす—育つ—居る—育てる—注ぐ」などの言葉は客観的な考察を示す語である。このように、共起ネットワーク分析からは、「はい」の場合は能動的な行動語群がネットワークとなり、「いいえ」の場合は客観的な考察語群がチェーンとなっ

ている。ここでは、学生の行動・考察という視点からのネットワークを示したが、今後、動詞以外の分析も行っていきたい。

3.2.4 アンケート結果と進路との関係

「施設実習に行って、施設で働こうと思いましたが?」の質問に「はい」と答えた学生と「いいえ」と答えた学生の進路を比べてみたところ、図13と図14のようになった。「はい」と答えた学生は、図13のように、施設32%、保育所26%、幼稚園16%、認定こども園10%となっており、各種別にバランスよく進路を選択している。このように、「はい」と答えた学生は、保育士資格・幼稚園教諭免許を生かせる進路を選択している学生が多いことが分かった。一方図14では、「いいえ」と答えた学生は、保育所が52%と半数を超え、次に認定こども園13%、保育士資格を必要としない一般企業13%となっており、施設に就職する学生はいなかった。このように、「いいえ」と答えた学生は、進路に偏りがあり、資格・免許を生かすことのない進路を選択する学生も多いことが分かった。

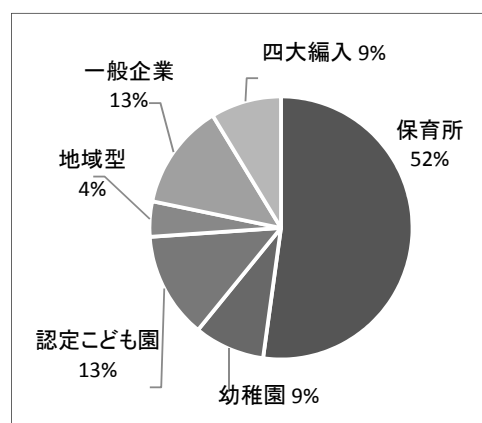
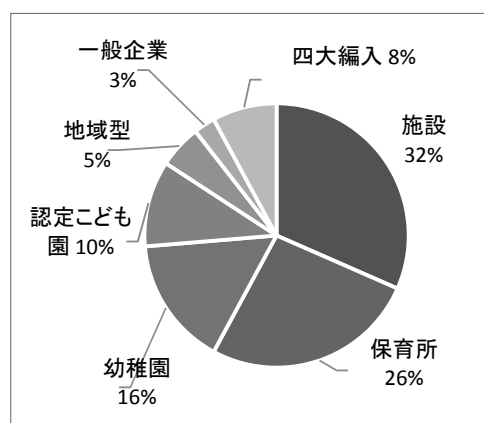


図13 はいと答えた学生の進路の種別

図14 いいえと答えた学生の進路の種別

3.2.5 まとめ

「施設実習に行って、施設で働こうと思いましたが?」の結果の分析から、「はい」と答えた学生は、能動的に行動し生き生きと実習をしていることが分かった。その中から実際に施設保育士として就職する学生も生まれたが、それらの学生も含めて「はい」と答えた学生は、いくつかの進路の選択肢のうちに施設を選択肢に加えてもよいと考えることができた、ということが分かった。それは実習を楽しめたという成功体験を持ったからである。一方、「いいえ」と答えた学生は、子どもとの関係がうまくいかず、客観的な考察に終始した実習を行っていた。そのため、実習を楽しみと思わず、ともすれば失敗体験として心に刻まれたことから、進路の選択肢になり得ないということが分かった。

このことから、施設実習での成功体験を得ることができれば、進路の選択肢を広げる可能性が生まれることになる。さらに、施設実習での成功体験を得るためには、子どもとの関係がうまくいく必要がある。そこで河野 (2011)¹⁴⁾は、学生自身の実習に対する取り組む意欲を高めるために必要なのは、自己効力感であると指摘している。自己効力感とは、自信を持って子どもと接することであるとすれば、その

ために、コミュニケーション力を向上させるための事前学習の必要性がある。しかし、鈴木(2015)¹⁵⁾が保育者にとって特に重要だと思う能力を学生に調査したところ、「個と集団の関係をふまえて、子どもと関わることができる能力」は14.1%の学生しか重要と感じていないし、「子どもを引き付ける魅力的な表現をすることができる能力」は22.8%の学生しか重要と感じていないことを明らかにしている。このことから、実習指導を行うにあたっては、学生自身がコミュニケーションを不得意としていることを前提に進めなければならない。今後の課題として、学生のコミュニケーション力の向上を図るための事前指導について研究を深めたいと思う。

また、藤重(2014)¹⁶⁾は、学生的心情を理解した上での取り組みが第一であると言っている。したがって、実習に対する動機付けにポジティブな影響を与えるために、施設実習希望調査に学生の希望を反映させる必要があることが分かった。さらに、実習施設によっても学生の意欲に差が生じることを前提として、学生を配属するためには、施設の特徴を十分把握する必要があることも分かった。今後の課題として、実習担当教員と施設職員との交流をさらに深めていく必要があると考える。

引用文献

- 1) 土谷由美子(2005) 保育実習に関する意欲と現状についてⅡ—学生のアンケートを中心に—。中国学園紀要, 4:p85.
- 2) 松藤光生・中村恭子(2016) 施設実習における実習施設種による学びの差異。中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要:pp48-65.
- 3) 多田内幸子・重永茂(2013) 施設実習に関する本学幼児教育学科学生意識調査、久留米信愛女学院短期大学研究紀要, 36:p57.
- 4) 土谷由美子・平尾太亮(2014) 保育士養成課程における施設実習に関する課題Ⅱ—現状と約10年前の比較—。中国学園紀要, 13:p32. のデータから筆者が作図
- 5) 松藤光生・中村恭子(2016) 前掲p66. のデータから筆者が作図
- 6) 古川隆幸(2016) 学生の社会的養護施設への関心と施設実習先決定過程に関する一考察—佐賀女子短期大学生へのアンケート調査より—。佐賀女子短期大学研究紀要, 50:p112. のデータから筆者が作図
- 7) 矢野洋子(2011) 保育士養成における施設実習の意義と事前指導に関する検討。九州女子大学紀要, 48-1:p131のデータから筆者が作図
- 8) 村田紋子(2014) 社会福祉施設における保育実習の成果と課題に関する一考察(2)。小田原女子短期大学研究紀要, 44:p15. のデータから筆者が作図
- 9) 古川隆幸(2016) 社会的養護施設実習を終えた学生の意識について：短期大学生へのアンケート調査より。佐賀女子短期大学研究紀要, 51(1):p111.
- 10) 松藤光生・中村恭子(2017) 前掲pp59-65.
- 11) 土谷由美子・平尾太亮(2014) 前掲P33. のデータから筆者が作図。図1におけるB短大に対応している。
- 12) 松藤光生・中村恭子(2017) 前掲p68. のデータから筆者が作図。図1におけるC短大に対応している。
- 12) 多田内幸子・重永茂(2013) 前掲p57. のデータから筆者が作図。G短大は新出。
- 14) 河野清志(2011) 保育学生の施設実習に対する自己効力感尺度の作成について。山陽学園短期大学紀要, 42:p29.
- 15) 鈴木久美子(2015) 保育士養成課程における『相談援助』科目に関する研究。常葉大学短期大学部紀要, 46:p111.
- 16) 藤重育子(2014) 保育実習における学びと課題—施設実習後の学生の振り返りから—。東邦学誌, 43-2:p162.